

北関東の風に

精神の建築家にして、図像の詩人

偉大な才能の持ち主に

敬意を込めて

2018年5月25日

井坂康志

栃木の夕景

死と夢

街のパン屋——シャガールに

聴け、わが心よ

碑

(無題)

魂は君であろうとする

書物

悪い時代

そろそろ終わりが来る

山鳩

虚ろな太陽

雑踏で

地上に巨人がいた頃

ふと、目が醒めて——君に

21世紀に日本人であるとは

(いちじくの葉はゆれて)

プラハ

言葉は

女性よ

錯雑

北関東の風に

栗色の髪

革命

町外れの除幕式

言葉はパンであり鉋物である

冷気に目が醒めて

青いスコップ

自転車

侘びしき風景

憩う魂

冬の朝

柳に

猫

(傷つくとは)

生態系

その言葉は、何処に

黒雲

エルザの婚礼

ポンプ小屋風景

書くとは

快活に、それでいて速過ぎず

枯れ野

未来は背後に迫り

人魚広場

高校を卒業した日

黒い夕日

我が来し方

オペラを書く

暗殺者

栃木の夕景

極北の荒れ地に打ち棄てられた
溶解するタイヤのように
厭な臭いの風が吹いている
電線は首吊り人の舌のように
だらりと垂れ下がり
商店に今日も人影はない
汚水は盗人のように道の端を湿らせ
うらぶれ果てた小狡い心根は
今日も土地を黒く爛れさせる
生まれては手をすり抜けていく
無益なセンチメント
現在ばかりか昨日をも喪失し
損なわれた地平に
黒く疲れた太陽が沈んでいく

死と夢

死とは誰かの夢の中に目覚めること
生まれる前のすべてを残らず思い出すこと
遠い潮騒の香りをかぎながら
坂道を自転車で滑ること
青い涙の跡を指先でなぞりながら
霧の街に再び生まれること

街のパン屋——シャガールに

濃緑の毒虫のはらわたは
ベラルーシの空を染め抜いて
故郷を思い出すとき
重いポルカと黒い犬
埃っぽい場末のパン屋
死んだ子らの白い手をつなぎ
今音もなく取り囲む

聴け、わが心よ

故郷を離れる夜汽車の窓で
聴け、わが心よ

甘く痺れる舞踏は終わり
今地平は蒼き海原に染まりゆく

聴け、わが心よ
遥けき死出でのその暇に

哀しみのみの世の定めと
その眼を細め遠く見据えよ

死だけを永遠の友として

碑

冬枯れの野末には
しまい込まれた写真のように
碑のかすかに語る
(かすか過ぎて聞きとれないよ)

雨や雪や風に洗われ
消しゴムみたいに丸くなって
枯れた薄い葉に埋もれて

(無題)

畦道に小石を含む水たまりのあるのは
数日来のやるせない雨のなせるところだ
田舎の少年の遠い目のように
乱れた暗い空を見上げている

今は昼というのに
糸ほどの陽も射し込まない
雪こそちらつかないけれど
誰もが捨て犬のように
ぼろをまとってさまよっている

安いビー玉の目をさかんに動かして
地獄よりも地獄的な
荒れた霜に圧せられた田野を眺めている
私は生まれたのだ

ここで
侘びしい北関東の風よ
癒しようのない悲しみを嗤え

魂は君であろうとする

魂は具現しようとする
朝も昼も
川のように休むことなく
君であろうとする
君が憧れるなら
旅立ちを望んでいるからだ
君が何かにただならぬ不安を覚えるなら
安住を拒否しているからだ
君は魂を裏切れない
君とともにいることを望むのなら
そして魂の最も高貴にして奪うべからざる武器は
言葉にほかならない
魂は君であろうとする
君自身であろうとする
その求める切実さに比べたら
幸福なんてたわいもない
霽に過ぎない

書物

書物は肉体であり精神である
背を持ち、帯を持ち

喉を持ち、袖を持つ
天と地を含み
全世界をつつむ神秘
言葉をあらしめた叡智の肉体

悪い時代

よい時代などあったためしがあるのか
眼前に現出する風景は
視界を遮るように
価値の記号がかなしくうつろな理性から
意味をはぎ取っては
今日も万葉の情緒を側溝に流していく
酷使された駄馬のように

雹はしとどに降り注ぐ
ベトナムのナパーム弾じゃあるまいし
ひたすらに死者と不具者とを
量産してやまない

いや、あの時代も悪かったが
今はもっと悪い時代だ
辱められた乙女のように
酔漢に踏みしだかれた新雪のように
汚された汚濁の言葉ばかりが
地下鉄で
コピー機で
コンビニで
太古の神秘劇の台詞さながら
英雄気取りで口にされる

打ち碎かれよ
悪い時代
カール・クラウドならこう言うだろう
「敗者にもまた呪いあれ」と

そろそろ終わりが来る

いつぞやとは思うけれど
そろそろ終わりがやってくる頃だ
蝉たちの声は死に絶え
雑草は色を失い
終わりはきっとやってくる

心配はいらないよ
君が見つけなくても
終わりが君を見つける

暗く地下を流れる川は
やがて地層を透いて
隆起した丘や
落ちくぼんだ谷を抜けて

大河に合流し
やがて海に注ぐのだろう
そろそろ終わりが来る
ひんやりと湿った夜風の囁きが
たった一つの兆しだ

山鳩

霧の田舎のゆるんだ電線に
山鳩の啼く

でーで、ぽーぽ
でーで、ぽーぽ
(これは父の口真似だ)

啼いている
きつと喉を丸く膨らませて
全身のしずくを払いながら

もう一つの世の誘いに
じつと身をひそめて

音もなく霧の降り注ぐ
早朝の貧しい田園に

山鳩の啼く
でーで、ぽーぽ
でーで、ぽーぽ

みな夢なのだと
霧に濡れる墓標のように

布団の中で耳を澄ませる
山鳩の啼く

虚ろな太陽

幾重にも
傷ついた旅団のように
雲が空を過ぎてく
かなしい靄にかしずかれて
死者の瞳のような
無機的で
虚ろな真冬の太陽が
なすすべもなく
活発で灼熱に激しながら
どこまでも酷く冷えている

雑踏で

新宿駅地下の片隅で
雑踏を遠く耳にして
倒れているのは私だ
まぶたは固く閉ざされているのに
耳だけはいやにはっきりしている

濁流の激しさも
頭骨の打ちつける爆音も
高原で夏雲を見送るみたいに
一点の曇りもなく
スクリーンに映っている

わかっている、終わりなのだ

死へのトンネルであることは
厭なものを見せてすまなく思うが
許してほしい

どうか許してほしい
さようならを言えなかった
あなたに

けれど痛みも苦しみもなく
せいせいと高原の風に吹かれる
私であるのは
かくも醜悪な姿態を晒す反面なのは
唯一の救いなのだろう
人の通わぬ下水臭い通路ばかりが
薄い影となって
何かを指し示している

地上に巨人がいた頃

ノヴァーリスの「青い花」に
洞窟の老人に巨人の骨を示される場面があって
その昔地上に巨人がいたのだと
彼から教えてもらった
ノヴァーリスは鉱山の測量か何かをしていた人だし
信頼できる詩人だから
嘘などはない

巨人はきっと険しい山をものぐ高さだったのだろうし
神命を帯びて生きていた
時に独立の峯を目にすると

巨人や龍の塚のようにも思われ
肉体なき今も
雲や風に姿を変えて
大地を巡るようにも感ぜられてしかたない

巨人は今もいる
死者たちとともに
そう思わなければ
詩も想像も成立の基盤を失う
なぜなら現在は
目に見える伝説であり
神話にほかならないのだから

歌も演劇も絵画も詩も
精神の霊のチェリオットは例外もなく
神話の流入によっていて
そのことが、私の視界に
異なる二重写しの風景を与えてくれる

あるいは東京に、北京に、ベルリンに、
サンクトペテルブルグに、
シドニーに、ナイロビに
往時の神話の再生しつつ創生し
午睡の支配する小半時
巨人よ、君が
街をゆっくり立ち上がるのを見る

ふと、目が醒めて——君に

もし、ふと、目が醒めて

あの教室の、片隅の、あの席で
灰色の活字を、目の前に
英語の授業で、灰色の教師が
無益な罵声を、張り上げていたら

流れた時間は、みな夢で
田舎のうらぶれた、高校生で
両親もまた、貧しい田舎教師
昨日もなければ、明日もない

こんにやくみたいに、のっぺりした日々
空をすきまなく、蓋する冬雲
眼鏡をかけた、小指ほどの想像力も
もちあわせない、家畜のような、人々

もし、ふと、目が醒めて
耳もとで、メフィストフェレスが
こんなふうに、ささやいたら

“そんなつごうのいい話、あるわけじゃないですか
あなたは所詮あなただ
栃木の高校生以上でも以下でもない
ただの夢だったんですよ”

君なら、どうするのだろう

21 世紀に日本人であるとは

今晚は葬儀
国を葬る日だ

自ら爆死する勇気もなく
遺産の上に惰眠を貪り
ささやかな人々を踏みつけて
不細工な舎弟も務まらず
もはや国とは言えないだろう

信条も約束も
魂も付託も
すべてに背を向けて
生きられる方がどうかしている

葬送の歌が聞こえる
歴史とともにあった人々の
長大な列が水を求める敗残兵のように
東から西へと連なっている

21世紀日本人であることほど
むなしいことはない
また切ないことはない

万神は泣く
ギリシア、ゲルマン、インド、アフリカ
新旧の聖なる王たちが
日本のために涙を流す
黙しつつも、魂を熱くして

(いちじくの葉はゆれて)

涙は地を濡らすけれど、君よ
君の幸せを願うしかできない私だ

何もできない私だ

君を北風にあてたくなくて
片隅で手を合わせるだけの私だ

淡い午後の陽ざしの
ゆらゆらと軒先にたゆたうとき
私は君のことを思い出す

心の中で、君の名を小さく呼ぶしか
祈ることしかできない私だ

君を思うたびに
南国の風にゆれるいちじくの葉のように
はらはらと何かざわめく

遠い潮に小舟の波を切るように
片隅でまだ見ぬ世界の
終わりをしている

プラハ

あなたの額には
悲しみのしわが
氷河のように刻まれ
なだらかな頬には
過剰な生気の宿る
若いソプラノ歌手よ
憂鬱な細いしんなりした体を震わせて
プラハの石畳に疲れた

東洋人の私に
生命の水を注いでくれる
小劇場の軋む舞台上
軽薄なドン・ジョヴァンニのバリトンとともに
魂を絞り上げるあなたは
あまりに美しい
あまりにかなしい

言葉は

言葉は地上で
最も硬い鉱物である
現実を掘り抜くには
水浸しの中で
鋭利な硬い言葉のつるはしを
今日もふるわなくてはならない
なまくらならないほうがまだ
言葉は何よりも硬く
しかも危険な鉱物だ
一度打ち抜いたら
元に戻ることはなく、
先に進むこともできない

女性よ

覚えている
少女の頃を

地下鉄の窓にかなしい横顔を映す
女性よ

覚えている

白い小さな手のひらを
陽にかざした日のことを

公園のベンチに腰かけて
水筒の麦茶を喉に流し込んだことを

日曜の温かな日だまりを
木陰のまだらな水玉を

雨降る前のおいを
おなかが空いて起きた朝を

覚えている
地下鉄の窓にかなしい横顔を映す

女性よ

錯雑

17の頃
毎晩ノートに言葉を書きとめた
錯雑の魂を
錯雑のままに
主語も述語も錯雑し
上半身と下半身さえ錯雑し

子供がピアノで遊ぶように
言葉をひたすらに書きつけた
あの言葉は今、どこで何をしているのか
言葉を裏切り続けたから
言葉に裏切られたのだ
シェーンベルクならいうだろう
小川のせせらぎを今
両手で結ぶような言葉を探せと
あの言葉よ
喉に流すに苦すぎるが
はがされた生木の
匂いのいっばいに立ちこめる
錯雑の言葉よ

北関東の風に

四谷の通りを歩く
御苑もほど近く
ベビーカーの女性や犬を連れた老人
就活中の学生を目にして
ふと心の奥に
北関東の風が吹き抜ける

硬い植物で編まれた鞭のような風が
こんな季節に吹いていた
蛇のようにとぐろを巻いてめぐる
邪悪な北関東の風よ

こんな日
小春日のうららかな

けざやかな午後

あの風に吹かれたいくなる
オレンジと深緑の電車から
卑屈な病める魂とともに
「無思想」という題の風景画を
死の黒煙のさなかで

栗色の髪

冬の夕暮れ
助手席のひざに乗る
君は眠り夕景の赤光の中にいる
栗色の髪は眩しく
昔歩いた公園の
かわいたどんぐりの香りがする
冬の残照に似て
飴色の瞳白い空遠くに
薄らぎゆく

革命

革命に身を捧げたいのです
無為に生きてきた自分がいやになったのです

かそけき風の雨戸を打つ
冬の昼下がり
こんな時代がいやになったのです

何もせぬまま
死んでいくのが怖いのです
世界で最も静かで
死のような透明な大気の中で

成就せぬ自分では
戦場で倒れる自分でいたいのです
革命に身を捧げたいのです

町外れの除幕式

目に浮かぶ、北関東の町外れ
解体中の三階建てのビル
一階に女性向け衣料品店
二階は小さな書店、三階は不動産屋の事務所
冬の遠い空にひとひらの枯れ葉舞い上がる日

高校生が向かい風に自転車で
現代文の参考書を見に来る
耳たぶを切る空気とともに
砂埃の貧しく立ちのぼり
かなた越後の山並みを黒く染める

目に浮かぶ、遠い日の日曜日
ビルの除幕式
横断幕に赤い墨で
ネクタイをしめた町長や
巡查長や町内会長が取り巻いて

うららかな春の日の
空にひばりの啼きわたり
祝福の熱につつまれた
その日を遠く想起する

今、引きちぎられた腸のように
泥濘に伏す鉄骨の
遠い日を思慕すれば
祝賀の日
町外れの除幕式

言葉はパンであり鉱物である

言葉は時にパンであり
何より堅実な鉱物である
世が建物や道からなるように
都市は言葉の建築物や道からなる
言葉の滋養を得て
日々の糧として
富む者と貧しい者とを分ける

とりわけ君よ、詩人だ
何も持たぬ清らななりに反し
いかに壮麗なる王宮を
広場を運河を
君はその魂の内奥に湛えるか

ロシアの貴族が自らの領地の果てを
見きわめがたいように
無数の鴨の飛来する沼や

トナカイの住む森の朝靄にけぶるように
君の言葉の世界ははるかに果てしなく
やがて造物主の懐に連なりゆく

言葉はパンであり
鉱物である
言葉は君の唯一性を
その毅然たる人差し指で指し示す
精神の井戸の
奥にしまわれた鏡である

冷気に目が醒めて

夜冷気に目が醒めて
思う、無為に年を重ねた自分を
年をとってしまった自分を
何も目指さず、何も為さず
いたずらに年ばかり重ねた自分を

読みたいものがある
ローマ建国の勇壮な歴史を
ギリシアの哲人たちの息吹を
朝鮮の古代の詩を
できたら旧約聖書ももう一度
タルムード

もう一度トルストイ、ドストエフスキー
トーマス・マン、ディケンズ
ワーグナー、ゲーテ

ある日病院のベッドに横たわり
一字一字を
蟻がぼったの脚を運ぶように
貧しい子供がパンの耳を口に含むように
昔日の言葉で魂を溢れさせたい

私は何も外に求める必要を感じない
なぜならすべて、一つの例外もなく
ただ電極に触れて
大洋のような力を思い起こしさえすればよい
残欠から太古の生物を復元するように

青いスコップ

泥のついた青いスコップ
濁いた砂に白く縁取られ
まだらの木漏れ日

低く飛行機のうなる
竹の匂いのする

オルガンと子供たちの声
笑い声も少々
白菜畑と牛舎ののどやかに

春はもう遠くないのだろう

自転車

自転車に乗せてもらって
夕刻の重く甘い空気
夏の来る前の兆し
松の梢の籠のようにうねり
薄赤い陽の注ぐ中を走る

自転車に乗せてもらって
なぜか一日の終わりの匂い
首筋を夕風の心地よく
空気とともにたゆたう
幼き記憶の快さよ

侘びしき風景

枯れ野は白い上州の山まで続くのか
尖った桜はうらぶれた
バブル紳士みたいに
ひたすら往時をうらんでいる
北関東の風の冷たさよ

わが心の芯を裂き
暗き瞳で見据えるか
いかに時の流れようとも
不具なる魂の復元されず

追いたてられるゲッターの民に似て

雲は湧きいで地平へと去る
いかに風景を描こうか
地の果ての呪われた死の土地を

憩う魂

一筋の煙のように
するすると立ちのぼる
枯れ野の真昼の幻影よ

田舎で死を定められた
救済されぬ魂の葬列が
天上の蓮に憧れて
慕い縫るかのようだ

摩耗し、嘲られ、霞のように消える
駄馬のような田舎者の魂が
冬の日寂れた田野に
うずたかい糞殻に灼かれ
憩い漂っている

冬の朝

冬の朝表に出れば
砕け散る鏡のような氷の地を覆い
手のかじかみ
頬はまだらに
極寒の風の吹きすさび

土手の上には上州の山並み
朝の三日月のくびれ
葬られた田野に浮かんでる
用水路は涸れて乾き
野末には昔の農夫の死霊の
黒く立ち震えている
私の故郷
大利根の冬の朝である

柳に

今は私の実家の庭は
ローズマリーやペチュニアの咲く
ちょっとしたものになっているのだが
私が子供だった頃、二本の大小の柳があつて
真夏などとげのある雑草に覆われた

うっかり半ズボンで入ろうものなら
傷でしばらくひりひりしたものだ
柳は一本は育ちもう一本は雑草に埋もれるように
やがて見えなくなった

窓の外には柳が一本残り
しかもいきいきと伸びていき
春には葉は青々と枝は天を突き
命の喜びを表現するオブジェになった

皮はごつごつして
ところどころうろをもち
あるところからゆるやかに曲がって

小さな生き物を育てていた

細くて白い蛇や、小鳥や、かなぶん、
そのほかの生き物たちの家だった
二十歳の冬、重機で無残に撤去されるまでは
柳は生きていた

今は私の家の庭の一部
樹があったことも知る人は少ない
柳が一つの宇宙だったこと
何よりたくさんの生き物を守り弁護し続けたことも
知る人は少ないに違いない

柳のあった一画が、今庭の一部であり
私が記憶することが
唯一の救いなのかもしれない

覚えている
柳の樹があったこと
柳の樹が守り育てた命を
そしての一つである
自らの魂を

猫

地上に暮らす人々の生態を知るなら
彼らが何を欲し、何を愛し、
何を期するかを
ぜひとも知らねばならない

僕たちは
比較的小型の密偵を送り込むことにした
秘密は秘密であるほどに
大胆さと繊細さの両方が求められるのは
太古よりの鉄則であるのだが
僕たちは同地に生息せる
ある小型生物を徹底的に研究し
外形と機能において類似せる生物を製造し
しかも、鋭敏なる視覚
微音も逃すことなき聴覚
出し入れ可能な鋭い爪
敵にさえ取り入る
柔和さ、剛胆さ、愛嬌を備えることにした

警戒を解きありのままの生態を実見するに
素顔を晒すのがいちばんだ
何より変装しなくてすむし
策を弄する費用がかからない
何より容姿は端麗で愛くるしく
同時に強い忍耐と頑強な後ろ足をもち
過酷な環境下でも弱音一つ吐かぬ
さらには糧食も住環境も
すべて先方に支弁させることにした

日中は某所にて通信を怠らず
彼らの生態を逐一報告せしめ
その情動、思考、美意識
ありとあらゆる情報の闡明に努めんとする
彼らはそれを猫と呼び
愛し慈しんでいる

(傷つくとは)

傷つくとは

冬の枯れ葉の厚い靴底で粉々にされること
しびれえいに半身を麻痺されること
涙の塩水に鼻まで浸かること
夕暮れ知らない街角に一人たたずむこと

傷つくとは

行く先を知らないバスに乗り込むこと
大切なペンを汚い手で無造作に触られること
胸の奥の小さな洞穴に荒い潮の流れこむこと
空一面が赤銅色に覆われること
同じ傷をもつ人と同じ涙を今日流すこと

生態系

見えないけれど

世界には生態系があって
林や森や沼や川、丘や山や海のように
時に大きく、それでいて繊細にうねりつつつながり合う
人は生態系に従って
自らの糧を得て、睦み、反目し
それでも一つの結びつきの中で生を送る
思想も宗教も哲学も神学も
建築も学知も事業も
家族も友も感情も理性も
すべては生態系のもたらす

ひとしづくにすぎない
生態系を生きることは
唯一の自己を唯一の中で生きる
懐かしさは魂の篠笛の響きである
涙は橋掛かりをつたう足音である

その言葉は、何処に

言葉は
少なくともある種の言葉は

私の欲してやまぬ
慰めと優しさをもつ言葉は

中央アジアを吹く風の
ブダペシュトの温泉の
あるいはシュヴァルツヴァルトの泉に似て

人の世の叡智の古層から
音もなく湧きいずる
流露してやまぬ
今生まれた精霊のように

精妙な白い衣をまとい
森を駆け
地を潤し
下草を凍らせ
農夫の頬を熱くする

言葉は

その言葉は何処に

黒雲

我が胸の奥の
小さな入り江に
ひとひらの黒雲の舞い
生温かい風の頬を撫で
白波立ち
白波の立ち
薄赤い浜に
重い雨の落ち
焼夷弾のように
あばらやの屋根を打ち
いつしか闇の訪れ
死のような闇のなかで
ヨットを沈め
漁船を沈め
タンカーを、軍艦を沈め
次々に巨大な手で
海中に引き入れ
赤黒く燃え
厳かに
太古の儀式のように
舞い
黒雲の舞い

エルザの婚礼

かくして伝説は具現化し
ブラバントの公女エルザと
白鳥の騎士の婚礼は来る
教会堂は子供らで埋め尽くされ
花びらの春の嵐のように舞い
ホサナにも似て
物語は終盤へと移る
名を聞いてはならぬ、出自も身分も
一切問いを投げかけてはならぬ
当人よりの固い戒め
愉快には一滴の破滅の宿り
遠い地平の黒雲の一筋
揺らめくように
我が方に漂い
やがてやってくる
別れの時
ワーグナーの手になる
愛、別れ、死、そして再生
魂に欠落をもつ私たちすべてに
あたら音と舞い
エルザの婚礼は今
宴たけなわである

ポンプ小屋風景

四角い畦の交差するところに

錆びたとたんの小屋がある
うずくまるタンホイザーみたいに
ひたすら汚れた水を吸い上げて
泡立つ命の水を送り出す
季節濁る鏡面に
昼の月の浮かび
およそ見わたす限り
人の姿は見えないけれど
振り向けば紺青の地平
見上げれば慈愛の白月

書くとは

ワープロをたたく
できれば（あくまでできればだが）
ピアニストが鍵盤に向かうように
文字が浮かび上がる
言葉の断片が
飢渴した魂のように
受肉を求めてざわめく

書くとは胸中に蛇を百万匹飼うことだ
いや違う
書くとは百万匹のさそりの棲む砂漠を
丸ごと肺に呑み込むことだ

書くとは
生まれてしまった苦しみを毒と炎として
言葉の矢尻にゆわいつけて
見知らぬ街の見知らぬ広場に放つことだ

書くとは
翼をもつ自由の使者とともにいて
地中に棲む呪いと
極を分かち合う儀式だ

書き続ける
意味などなくどこへも
つれていってはくれない
それでも書かすにはいられない
砂漠が井戸を隠しているのを
知っているから

私は巡礼
ひたすら赦しを求め
命の水を求める
それだけで
書くのには十分だ

快活に、それでいて速過ぎず

こうして川は流れゆくか
年を経るにつれ、時は速く過ぎるという
自然の与えた一つの慰安であるけれど
我が心の熱く燃えるに反して
あまりのくすぶる木炭の残骸よ
そこにさっき生まれたばかりの木枯らしの
子猫のようにじゃれついてくる
土くれのごとき我が生に
2017年の暮れてゆく

こうして川は流れゆくか
快活に、それでいて速過ぎず
ハイドンの弦楽四重奏に似て
いがらっぽい弾薬の香りを残して

枯れ野

やってきたよ
君の想像の世界に
コントラバスのピチカートと
低音のティンパニの鳴り渡る
君の世界に
望みは遠く果てしなく
地平にしぼし響く角笛
ここは君の世界
どこにもなく、どこにでもある
忘却することを忘れつつ想起し
目覚めつつ夢を見て
夢見つつ目覚める世界
やってきたよ
とうとう今、君の世界に
見てごらん
枯れ野の果ての古えの匂い
空は渡りゆく龍たちでいっぱいだ

未来は背後に迫り

「歴史を書くとは、過去から脱する有効な方法である」——ゲーテ

未来は背後に迫り
過去は前方に横臥する
君は裂け目にかかる
腐った板の橋の上で
思案に暮れている
あるいはとらわれている
どちらが前なのか後ろなのか
少しばかり沈思したまえ
君の眼のついている側が
前なのだ
目視できるものが過去だ
ならば過去を前方にある
君よ、前方を見つめよ
曇りなき一對の眼を
斥候が地平ののろしを見逃さぬように
過去の荒れ野を凝視せよ
視覚でとらえる風景を
何より君のもつ
一對の目を、瞳を、虹彩を
信ずるのが始まりだ
それこそが世で最上の高貴さ
美の具現であり君はいついかなる時も
その一對の眼の美とともにある
過去の中に未来は生起しつつある
めぐる四季のように
継起する過去の像

それ以外、頼りにすべきものはない
魔女や占星術師、経済学者はみな嘘と知れ
見えないことを語るすべての山師を
軽蔑せよ
かの賢人は言った
「死は前よりしも来たらずかねて後ろに迫れり」と
君自身の来し方を
生きる世界の来歴を見よ
できれば書き記せ
それが背後に迫るものの
影となるだろう
鏡に映り込む撮影者の片鱗に似て
それが君を知る
唯一の道である
あてどない空想に
時を浪費するな
夢などみな偽りと知れ
それは卑しい知性と
卑しい想像力の
さらにその卑しい残滓に過ぎない
澱みなく流転する
過去の表象に目を向けよ
自ずと世の君自身の意思は
ロダンの彫像のようにある日
一つの機巧な形態をもって
君の前に顕現するだろう

人魚広場

ある夜フィデリオの序曲に

耳を傾けていたら
次々と胡桃ほどの大きさの
映写機の回り始め
故郷の電柱や
隣町の衣料品店に混じって
ワルシャワのトラム駅が現れる
向かいには黒い森 空はもちろん赤銅色
黄色いトラムの滑り込み
私は車中の人となる
異国のアナウンスが言う
“アレシュターヴァシュターマク
クィナヴァータースチィ”
古代の秘儀に通じる何か
やがて車体を軋ませて
石畳の市街に入っていく
集合住宅は砲撃に灼かれ
タールのような内臓を飛び散らせ
重いケミカルな匂いが立ちこめている
見かけるのは装甲車とジープくらいで
生身の人の姿はない
衝かれたようにトラムを降りる
ヴィスワの水の匂いを頼りに路地を抜けると
そこは人魚広場
盾を構えいくぶん斜めに
反り返るサーベルを天に突き
虚空を見据える像
切るような小雨の中
フィルムは雑音が混じりはじめる
映写機は活動をやめる
気づけばレオノーレのティンパニ
世界は復元される

高校を卒業した日

何を思う 今も
胸を去ることなき
流露してやまぬ痛み
いやましに日々新たなる情趣よ、感懐よ

陸離たる収容所
呪いの乗り合いバス
冬枯れの田に音もなく降り注ぐ霜のように
時は過ぎていく
車中の窓に映る自分が
鋭利な別人に見え
田舎の運転手からは
酸えた厭な臭いがする

銀縁の安眼鏡の死んだ眼で
深刻な真空を徳目に置き換えるとき
人生を諦めたせいというのだ
“赤銅色の空の下で
寂寥の中に生まれ、やがて
冷たい土に埋められるのだ”

思うはバスを降りること
明日かもしれない
ただここでないどこかへ
魂を養うたった一つの
ちいさな言葉を求めて
川べりで、森で、暗い教室で
かみ殺した嘲笑で餌付けされた

家畜の群れは墮落に余念がない

けれども来る

やがて来る

古ぼけた田舎のバスにだって

ちゃんと終点くらいはあるのだ

バスを降りる日が

手のひらには一枚の切符

しわと汗で印字も読み取れない

それでも来る

宗教的喜びとともに

古代ユダヤの喜びにも

匹敵する解放の日が

“イスラエルの乙女らよ、聞け

汝らは慰められるであろう”

そのとき、

曲がりくねった道はまっすぐになり

谷は平地となり

ひばりの舞い

牛や羊の憩う丘は

一面の緑となる

それでも来る

けれどもそのとき

言うべきことは何もない

語るべき相手もない

振り返るものもない

それでも世界が軋みを上げて

復元されていく

その時誰かが
北ドイツあたりの映画監督が
後ろからそっとチューニングを回したように
一挙にカラーへと変化していく
体温を感じる
生きていた
世界に生きていた

未来に何のあてもない自分だけれど
山が語りはじめる
道が語りはじめる
無能と説得され続けてきた自分が
優しく戒めるように

悪夢は終わった
ハインリヒ大王が到着した
金のトランペット
ファンファーレがこだまする
世界は異なる場所になる
時間は空間に置き換えられる
感触、響き、匂い、熱
空の印象、行き交う車、ざわめき
遠い山並み

生き抜いた
誰をも殺さずに
人も、自分も、誰をも
それは達成だった
灼熱の時間が
懐かしい場所になる

水車は回転をはじめる

自転車に乗り、稜線に眼をやる
ところどころ薄赤い冬の空だ
雪になるのかもしれない

切るような北関東の風
火照る頬を今も
今このときも
忘れたことはない

黒い夕日

夕方になれば
木霊のさざめきとともに
強烈な巨大な夕日が落ちていく
熟柿のように唾液をしたたらせ
ほとぼしる鮮血のような夕日だ
黒いカーテンを引くように
部屋は暗くなり
一気に気温は下がる
冷凍庫のスイッチを入れたみたいに
黒くなり
苦しくなり
砂利を散らして
あの車が帰ってくる
恐ろしい時間が始まる

我が来し方

その青白き平原のごとき
我が来し方をたどれば
ねじくれた山菜にも似て
始点は定められ
いたずらに美に善に理に
憧れたばかりに
かえって道を失い
ほんとうならば
豚舎の子豚のように満悦して
餌付けされればよかったものを
あるいは田舎のあざらしのような
教師あたりで
済ませておけばよかったものを
時に内面の地熱に耐えかねて
狂える羅針盤に導かれ
あの故郷から遠く離れて
離れるほどに厭うほどに
鋭い棘付きの風のざらざらと
我が胸の奥の平原を歩き過ぎる
利根の土手の夕日に
刃物のように伸びる影とともに
我が来し方に
回顧的追憶を向けるとき
凍る激情の今も
古井戸にこだまするを知る

オペラを書く

一つの世界をつくるのは私にとって
建築するよりむしろ
トンネルを掘るのに似ている
料理をつくるよりむしろ
皿を洗うのに似ている
弁証法よりむしろ
素描に似ている
すでに世界は心の中にあるのだが
外に引き出すのはまた別のこと
地下に湛える湖から
現界までの距離は果てしなく
一篇のARIAは
溶岩に似て素手で扱いかねるのは
常のことで
死の急勾配を
永遠と思われるほどに登り
岩に爪を立て
時に道は失われ
日は暮れて
尾根道を見つけるまでが
苦難なのだ
人も通わぬ道かと思いきや
かの賢哲たちの散歩道と知るとき
私は心から驚倒せずにいられなくなる
さらにそこから
一本の鑿を鍛えるように
熱しては敲きを繰り返す
水で清めては熱し

自ずと形の現れるを待つ
それは古代ギリシアの霊の
肉体を獲得するように
燦然たる神々しさ
こうしてオペラを書く
観客の表情を想像して
ついに完成を見ず
また仮に完成しても上演を見ず
あるいは劇場支配人の
長持ちにしまい込まれ
どれほどのオペラが
序曲さえ演奏されずにいることか
私たちは誰も
上演されなかったオペラを
一つはもっている

暗殺者

今日も遠いビルの屋上の
水道設備の物陰から
私の右首筋の一点に
びたりと銃の照準を
当てるのは誰だ
鉄臭いトリガーに
右人差し指の第二関節が折られ
震えている
いっばいに見開いた右目
死んだ沼のような左目
銃口の軌道はかすかな
放物線を描いて

鈍く光る銃弾は
一つの可能態として
書き物をし
資料に目を落とし
コーヒーを口にする
私の首筋を
すでに貫いている
それが現実でないのは
偶然に過ぎず
アイデアの世界では
既に兇弾は
皮膚を紙のように裂き
盛大なる血の噴水の
床を温かく濡らすのだ
暗殺者は軽く目礼し
影の中に消えていく

雪

雪が降ると思い出す
私が魂の不具者であり
漂白者であることを
故郷を失い
犬のように街をさまよう
愛を求める
一つの魂であることを
ひとひらの雪の
まつげにかかり
耳が芯から熱を帯びるとき
今再び夢の中に生まれ出で

旅路は果てることもなく
白々明ける雪原の
鳥の足跡のように
消えることはないことを

大山の雪

枯れた棚田に浮かぶ
古賢にも似た姿
相模の田野から大会まで
ささやかな人々に目をとめ
鷹揚にまた慈悲深く
その憂愁の警咳に接するとき
胸の奥処に青き墨汁の
淡く滑り布ける

名づけられることなき感情

それは意識の地下水道をつたい
忍び寄る顔のない師団だ
陽に当たる街路の直下には
自分も知りえない
果てなき暗闇の歯のない口を空けている
太古の呪いを蒸溜し
高度な情報時代に再び
鋭く曲がったかぎ爪で
魂をえぐる
それは慰められることなき感情

名づけられることなき感情
墓もなく標もなく
今日も寒々しく
街路の下で震えている
捨てられた小さな神々の群れである
彼らを蘇らせ
再び生かすのは何か
それは言葉だ
通行の言葉 (password) だ
究極にして唯一の電極
編み目のようにはりめぐらされる
地下通路と視界をつなぎ
神経回路に脳細胞に
最も古い情緒器官に同通し
内に眠りを食る
情動システムを覚醒させる
あらゆる言葉は
何かのパスワードだ
それはあらゆる名づけられることを求める
感情につながり
この世界を地上と地下に
光と闇に分かつのである

大車輪

草地に黒く錆びた
巨大な車輪
小山ほどの大きさで
赤茶色の鱗の鉱物に
隙間なく蔽われている

私が生まれる遙か前から
そこにあると聞くが
昔は回転もしていたという
何のためなのか
どんな風なのか
私の小指ほどの想像はそれを拒否する

かつて鉾山で使っていたのだとも
戦争で敵軍が残したとも
あるいは太古巨人族の用とも
様々言うのだが
いったいそれが何なのか
ついぞわかったためしはない
今日も私は車輪の前に
一人ポケットに手を入れて
たたずむたびに
問うてみる 語ってみる

それが何であるかは知らぬけれども
車輪は私に囁く
風を通して
巨人のうずくまった姿
立ち上がり
大空の下
爆音とともに
再び回転する日を想像する

やがてくるのだろう
いつかはわからぬが
私が目にしうるかも
わからぬが